

対談者

阿久比町 町長

竹内 啓二 様

半田青年会議所 理事長

曾根 香奈子



安心してしまったら安全は確保できないのです。

曾根香奈子（以下曾根） よろしくお願
いします。

阿久比町長竹内啓二様（以下町長） よろ
しくお願います。

曾根 町長の所信を読ませていただきま
した。勘違いでしたら申し訳ありません
が、理事長所信に似ているなどと思いまし
た。背景があり、その後何をやるとかの
が明確に記されていて、最後に「結びに」
とあるのを見たときに、尊敬する先輩の
所信だなと感じました。さまざまな方の
所信を拝見していますが、あの書式で書
かれているところに、青年会議所を卒業
された歴代理事長の方なのだと思しま
した。

その中に記載がありました「活力ある
まちづくり」という部分で質問させてく
ださい。

取り組みの中で「活力あるまちづく
り」「協働のまちづくり」とさまざま
な言葉が出ていましたが、新庁舎にマルシ
ェとか、市民参画型のまちづくりをやっ
ていこうということを感じました。

町長の思う「活力あるまちづくり」と
は、どのようなものか教えていただけま
すか。

町長 阿久比町の人口は約二万八千六百
人ですが、私が町長になってから十五・
六パーセント増加し、世帯数では四十パ
ーセントほど増えています。

結局、活力があるということの数値で
示すのなら、やはり人口というものが大
きな力だということが、町長をやってみ
て分かってきました。誤解しないでいた
だきたいのですが、「数は力なり」という
言葉がありますが、やはりボリュームが
あった方が、まちとしての活力は生みや
すいということが現実にあります。

例えば阿久比駅ですが、国土交通省な
どに掛け合いながら陳情を繰り返した結
果、平成二十年十二月二十日に特急停車
駅になったので、団地開発は一気に勢い
がつかまりました。

国も地方もまちを元気にしようとい
な政策を打ち出してきましたが、地方創
生はうまくいっていません。地域の活力
は地方創生の要ですが、一民間の鉄道会
社が特急を停めたことによって、その団
地だけでなく、そのまち全体の町民にと
つての利便性が良くなったということ
で、まちづくりが一気に加速しました。

私の所信の話をされましたが、所信の
基本的理念の「阿久比の自然を守りなが
ら利便性の良いまちを作る」これが終始
貫かれています。一企業の力の方が、行
政でいくらがんばってもなかなかできな
いことを実施することができるともあ
ります。まちづくりにおける民間の利用
ということなのです。今進めている知多
半島道路のコンセッションスタイルは、
東京の会社がパーキング隣接地に「愛知
多の大地」という、刈谷のハイウェイオ
アシスのようなイメージの構想を提案し



てきました。それに対して行政ができることは、農地の用地変更の手法とか、利用者が高速道路の人だけでは地域の活性化にならないから、普通の町道からも入れるような道路の建設などです。これも民間活力を使った町おこしです。でもできないし、民間だけでもできない。一番大事なのは、そこに住んでいる人たちを意識であり、どういう町にしたいのかを気付かせることが活力の元となるものかも知れません。

曽根 私たちの活動も、町長がおっしゃってる「数は力なり」というところがありません。私たちの活動に照らすと、数は力なりというのは会員の拡大活動と同じで、今年は五十三名でスタートしていますが、最低十五人拡大して六十人台に持っていくと考えています。町長が在籍していたときは百五十人で活動をしていて、そこにたどり着かなくても、五年、十年の計画の中で一年ずつ人数を増やしていこうということが目標です。それが数は力なりということなのだと思いま

す。

町長 誤解されてしまうといけないのですが、質を上げていくことは大切なことです。しかし結果を出すためには、ある程度の数がないと無理ということが言いたかったので。今後は人口が減っていくので、その中でいかに質を高めても、果たして人口減をカバーできるのか、ということですね。

これからの時代は、やはりAIやロボティクス関係の力を借りないと、社会は成り立っていかないと思います。五年、十年で社会が大きく変わるということをポジティブに捉えていこうと思っていま

す。行政で変えるというよりも、変わらざるを得ない状況が日本の中で起こってきて、それを克服していかなければなりません。第四次産業革命とも言いますか、新たなものによって変えるという、その時代に入ったという気がしています。

曽根 AIの部分で言いますと、次の質問につながるのですが、今後のまちとして取り組む展望の中の、防災の項目でデジタル化という言葉が出ていました。

今後の取り組みとして、そういうことを展望されているのでしょうか。

町長 防災と言えども当然安全という意味合いがありますから、それに対してどういう形で人的資源も含めてやっていけるかという課題です。

私は人生で三回、我が家の水没を経験していますし、避難所生活も体験しています。その経験を生かしながら防災減災対策を行ってきました。デジタル化だけでもいけないのですが、数値というものは大事です。行政が全部を助けるということとは不可能に近い部分があるので、どの部分にどのよう焦点を当てていくのかということが大切になります。数値を元に素早い決断が必要になるのが防災



です。

安全と安心の違いについても重要なことですのでお話ししたいです。安全という言葉と安心という言葉はペアで使われることが多いのですが、安心したら安全は確保できないのです。安心しないから安全を確保するために備えることができるのです。安心したということを言ってしまった時点で、安心しきってしまい、安全からどんどん離れていってしまいます。だから絶えず「安心ではないのですよ」と、行政は防災について言い続けなければなりません。

話がそれてしまいましたね。

曽根 安全にという言葉をいただくと、私の仕事が製造業なものですから、弊社の社長が常日頃、生産性をあげることだけではなく、どんなときでも安全第一と言っています。

町長 アメリカのUSスチールの会長だと思えますが、他の経営者たちが「品質第一」という時代に、品質第一ではなく「安全第一」なのだと言っていました。



先人たちがやってきたことを振り返ったり、その言葉を聞いたたりするということは良いことです。

曾根 安全ということでは、スポーツ施設の建設も視野にあると、町長の所信に記載されていましてのですが、総合体育館のようなものなのでしょうか。

町長 それについては、意見が二分されています。スポーツをされる方はおそれなく、サブアリーナも持つ総合体育館構想というものに賛成されます。しかし、地域住民の方は、自分の家から夜にちよつと行ける学校の体育館のような地区体育館を造ってくれた方が良くとおっしゃいます。そして災害時にも避難所として使えます。これも被災経験者として言えるのですが、自分の家が災害を受けたときにそこから離れることはできないです。

だから命を落とすのです。私も家の二階まで水が来たときにさえ避難できませんでした。夜になり、消防さんと区長さんに、強制的に二階の窓から避難させられました。それほど避難することは難しいことです。

今後半田市さんが大規模な体育館構想というものを作り上げると聞いています。半田市さんの構想があるのならば、お聞きした上で広域行政の考えが一致すれば一緒になってやれる形もあるでしょうから、それも一つの選択肢として考えているということです。

曾根 防災について拝見したところ、その文言がありましたので、お伺いさせていただきます。

もう一つは、私も子どもがいる身です。やはり子育てのことが気になります。

私の場合は働きながら子育てすることしかできなかったものですから、家族や保育園の力をお借りして子育てをしてきました。さまざまなお家庭がある中で、お母さんが子どもを育てるということで、阿久比町は子育てに対しての支援のサイトが、すごく素敵だと感じました。

取り組みとしては、半田市在住の子どもでも阿久比町の支援センター「あぐびっぴ」で受け入れていただいて、とても良い取り組みだと感じています。

それでは子育てに対してどのような展望をお持ちなのかをお聞きしたいです。

町長 展望というのは難しいのですが、子育て、それから教育というものは、今の私の町政で一番大切にしたい部分です。庁舎の前に、五人の童の「童心満々」という像を設置したのも子育てに力を入れている本町の姿を知っていただきたかったからです。

子どもは阿久比にとって最高の宝だと

思っていますから、その子たちが素直にすくすく育っていつてもらうために、町としてできることに手を差し伸べなければいけません。

以前、私立保育園の園長との間で、お母様たちのお勤めの関係で、乳幼児にも行政が手をかけていく時代になってきたことに疑問を感じていることについて話をさせていただきました。

昔のお母さんは子どもをおぶって炊事をやり、洗濯もやりました。そういう形のお母さんというイメージから離れ、保育園に預けなければ仕事に出られなくなり、代わりに行政が育児サービスに力を入れことになるわけですが、そうすることによって親子の絆とか、親子の愛情が離れていくことにはやはりほしくないかというところが、私の中のジレンマとしてあると話したところ、保育園の園長が、「町長がおっしゃっていることは、私も良く分かります。しかしそれを行政がやらなかったら、もっと育児が酷いことになっていく時代が来てしまったのです」ということをおっしゃられました。

それから私は子育て、教育に力を入れていくことになりました。本当にゼロ歳児を預かってしまっているのか、「三つ子の魂百まで」というように、三歳まではお母さんが育児できる社会を作らなければいけません。将来的にこのことによる影響が出ないことを祈るばかりです。

これからも労働力不足が進む中で、女性にも働いてもらわれないといけないのでやむを得ないことなのでしょうが、子どもたちの心に与える影響が心配です。

私の好きな渋沢栄一の「論語と算盤」という本があるので、一度読んでみていただきたいと思います。明治の終わりころの執筆と思いますが、そこにはまさに今の時

代の問題点と重なる多くのことを指摘しています。江戸から明治への変革期の女性の生き方も大変であったと思います。文明開化時代は、今の時代より変革が激しかったわけで、文化も文明も、一気に江戸時代から切り替わる時代を生きてきた人たちの言葉には教わるものが多くあります。

おそらくこの後の話にも入っていくでしょうが、連綿と継続した社会というものも、人間というものも、その流れの中に身を置いていますが、自然の流れに任せていくものなのか、そこに人間の文化文明を入れた知恵というものによって、将来の社会というものを考えながら前に進むのかというテーマも非常に面白いと思います。青年会議所としては良い研究材料になるのではないかと思います。

また話がどんどんそれましたね。曾根 いいえ、久々にお話をたくさん聞くことができました、とても勉強になります。

町長がそうおっしゃる中でも、阿久比町はさまざまに取り組みをされているね、というお話をよく耳にするものから、そういう中でも時代に合わせることができたのかなと思います。

町長 それでも予算がないとやりたいことができないから大変です。

しかし教室へのエアコンは良かったですね。七年前から設置し始めて全部終わった時点であの猛暑が来たわけですから、非常に良いタイミングでした。

先程の活力の話ではないですが、行政は遠い先を示して、夢を与えなければいけないこともあります、行政が実際にやる場合には予算もありますので、あまり遠いところに手を出すと失敗してしまいます。そのため、社会の少し前を意識

した形で政策を打っていかないといけないと思います。

青年会議所は青年経済人を謳っているでしょう、だからそれを忘れないようにしてもらいたいところはありますね。

曾根 ありがとうございます。青年会議所の話をいただいたので、最後の質問をさせていただきます。

行政の立場であられる方から半田青年会議所にエールや、何か求めるものがあるればお伺いしたいと思います。

町長 青年会議所のおかげから思っているのですが、やはり自分たちの活動エリアの中にいる地域住民との橋渡しをしてほしいですね。

この『知多半島夜明けまえ』は私が平成三年に、長期ビジョン委員会として作った本ですが、青年会議所の役目というものを載せてあります。

結論から言えば、まちづくりは、地域の気付きと心構えが必要だということであり、住民に責任を持って自覚をしてもらうこと、そして地域づくりに参加してもらおうときに手助けをするのが、青年会議所の役目だということを、この本の中では言っています。もうそのときに青年会議所は、地方分権という言葉を使い始めています。要は地域で生活してい



る、各住民一人ひとりの考え方をレベルアップさせないと、自己主張型だけの個人主義では、利己主義者ばかりになってしまいます。本当の意味での個人主義というか、自分が個人で責任を持った上で、社会への貢献ができるという、そういう民主的な住民をリードするというのが、青年会議所のリーダーシップの持つていくところだと思います。

全体層というものを底上げして、国民投票などの大衆の判断が、将来の歴史家が見ても妥当だったと言えるようになって欲しいです。

私が政治判断をするときでも、百年後の歴史家がどう評価するのかに気を留めて政策を考えています。

青年会議所の姿勢としては、自分たちも地域住民の一人として、経済活動しながら情報も入って来る立場にいる自分のポジションというものがどこにあるのかをしっかりと見極めた上で、なおかつそのポジションでできることを精一杯行動に移し頑張っていただいたく思います。

曾根 町長が青年会議所に所属していた時の、そんなに前からの案なのですね。

町長 これは東京陳情に動いていた時代の資料ですからね。これを作っているときが一番楽しかったです。旅館に閉じこもって、みんな情報突き合わせながらやっていったのですが、知多半島はおもしろい場所になってくる気がして夢を追っていましたね。

曾根 お話を聞いて、すごいという言葉しか出てきません。今の話をぜひとも現役のメンバーにも伝えたいです。

町長 それでもこの当時は経済人として生きると思っていて、行政に入るとは思っていないかったです。ただ、行政に入ったときには議員もやっていた中で、まったくの素人のままいきなり町長になり

ました。それでも町長として活動できたのは、一つには理事会に出ていたということと、議事法を知っていたということと、KJ法により物事の起きていることをいかに分析するかということができたということ、そして話し方などを青年会議所の活動を通じてきっちり教わったからだと思っています。そういう面で青年会議所は私を育てていただいたと思っています。

曾根 一番好きな言葉をおっしゃっていただきまして、ありがとうございます。青年会議所に育てていただいたというのは、私もすごく感じていますが、まだ現役なので終わっていないのですが、すごくそれは感じています。この想いをメンバーに伝えたいと思います。

町長 ところで、そちらのパネルのものは青年会議所でのように関わるようになったのでしょうか。

曾根 町長から話を振っていただいています。それでは、全国の青年会議所で推進していただきます。SDGsについて話をさせていただきます。

二〇一五年に国連の全開一致で採択されたのがこのSDGsです。二〇一九年



度の日本青年会議所が、SDGsを日本で一番推進する団体になるということを宣言しました。そこから、各地六百九十の青年会議所一つひとつが、この運動を推進することで、日本で一番推進する団体になることを目指して活動しています。

町長 JCI（国際青年会議所）は動いていないのですか。

曾根 JCIも動いてはいます。

二〇一九年の今、なぜこのように動いているかと言いますと、政府が国連に対して発表をする節目でもありますが、私の理事長所信の中で、その日本の取り組みに追従して、このSDGsを推進するということが掲げられているからです。

そのような経緯から、本日このように説明をさせていただきに來ました。それは担当の間瀬から、SDGsについて説明をさせていただきます。お渡しした資料をご覧くださいながら話をさせていただきます。

間瀬理子（以下間瀬） 宜しく願います。

SDGsという言葉聞き慣れない方が多いかも知れませんが、行政の皆さんもこれから準備をしていく段階かと思えます。

SDGsには十七の目標がありまして、半田青年会議所の活動をその目標に対して当てはめた場合、公開討論会がこの三つの目標、「質の高い教育をみんなに」、「安全な水とトイレを世界中に」、「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」というものとなります。

このことは、半田青年会議所がこれまでやってきた活動の中にも、SDGsに当てはまるものがこれだけあります、という例として作成してまいりました。

阿久比町の場合、この対談の前にお伺

いしてきました阿久比パーキングエリアにあります「大地の種」の観光を例にしますと、そのお土産や食事は、地域の特産物を使っているという印象があり、「働きがいも経済成長も」ですとか、「つくる責任使う責任」、「海の豊かさを守ろう」というものに該当すると思います。つまり、今まで活動してきたことがSDGsに該当するので、特に難しい問題ではないということです。

私もSDGsの担当委員会ということを知ったときに、国連とか行政とかよくわからず、何か難しそうな取組みだと思っていました。そんなときに、SDGsを深く知るためのカードゲームの存在を知りました。このカードゲームを実際にやってみるとSDGsの説明を受けると、いままでやってきたことにSDGsを当てはめるように意識をすることで、その活動の質を高めることができるということを学びました。

私共もまだまだ勉強中の身ですので、十分に説明できるわけではないですが、阿久比町の役場の方々にも、このカードゲームの体験を通じて、SDGsのことをご理解いただくお手伝いできたらと思っています。

町長 話は変わってしまいましたが、結局「生きる」ということなのだと思いますよ。今生きなければ将来の生命体に残していけないわけですから。

これは日本の宗教的な話になります。経典もなくただ生きるのみで良いと言っているのが日本の神道なのです。

昔から生きるという教えだから自然と共生しないといけないという教えが日本のDNAの中に流れていると思います。共生するにはすべてのものとのバランスが大切になります。私はバランスという言葉をよく使いますし、町長室の中に天

秤ばかりをわざわざぶら下げて、いつでも見えるようにしています。

結局物事が動くということは何かと言うと、密なところから疎なところへの移動で、初めて動きが出てくるし、すべて濃いところから薄いところ、高いところから低いところへ流れが発生します。つまり絶えずバランスを取ろうとして動きが生まれます。すべての問題がバランスを取ろうとして動いているのですよ。それは自然の摂理だと思います。

SDGsで提唱している十七の目標もバランスを取るためにどう行動したら良いのかを訴えているものと思います。この問題に対して、どのように関わるのかということを理解するためのツールの一つとして、カードゲームを使用するということですね。

間瀬 このカードゲームも最初はよく理解しないままの状態で、セミナーと呼ばれて参加したのですが、このゲームを通じて、自分だけ良ければとか、日本だけ良ければよいという問題ではなく、皆が一緒に良い方向に進んで行かなければいけないのだ、ということに気がつくことができました。

青年会議所に入会して、このような取り組みをさせていただくという貴重な経験をさせていただいています。

今、大学などにもこのゲームを実施する時間を設けていただけないか、という交渉をしている段階です。さらには、役場の職員の皆さんや、小学校とか中学校などの生徒の皆さんにも、体感してほしいと考えています。

町長 子どもでもできるゲームですか。

曾根 子どもでもできます。

町長 子どもでもできるのなら、ぜひやらせてほしいですね。

間瀬 子どもたちにやらせることで、選



挙とか自分たちのまちを良くするのは自分たちなのだということに、気付いてもらうきっかけになるゲームなのではないかと感じました。

町長 なるほど。そういう運動を起こそうとしているんですね。

そのカードゲームは防災なんかで使われている、避難所HUGに似ているのではないのでしょうか。

曾根 HUGよりもカード要素が強いので、本当に子どもでも楽しく学べると思います。

町長 楽しく対談させて頂いている中で、申し訳ないのですが、そろそろ残り時間がなくなってきました。

曾根 こちらこそ、ご公務でご多用にもかかわらず、私たちにこのようにお時間をいただきありがとうございます。

SDGsの取り組みという部分では、まずさわり程度で気付きをしていただいで、どんな取り組みなのかということに町長が興味を持っていただけたというこ

とだけでも、感謝をしております。また、本当に現役のメンバーにも聞かせたいお話をありがとうございます。町長 どうしても青年会議所の先輩の気分で話してしまいますね。もっと首長として話をするべきでしたね。こちらこそ、どうもありがとうございました。



竹内 啓二 様

昭和29年5月18日生まれ。
愛知大学法経学部経済学科卒業。
家業の野崎織産(織布業)および有限会社野崎殖産に勤務したのち、平成14年12月18日より阿久比町長に就任し、現在5期目を務められています。
半田青年会議所、第30代理事長でもあります。